

Giovanna Cosenza (eds), *Paul Grice's Heritage* (Brepols, 2001, 281p.)

三木那由他

---

本書は十一篇の論文からなる論文集だ。テーマはグライスの言語哲学。ここではとりわけ興味深い二篇を取り上げる。ブライアン・ロアーの「話者の意味に対する社会的意味の随伴」と、アニータ・アヴラミデスの「デヴィッドソン、グライス、言語の社会的側面」だ。

ロアーの論文は、グライスによる意味の分析と言語の公的な意味との関係論じている。

グライスは、さまざまな(言語的、あるいは非言語的)意味のなかで話者が個々の場面で意味すること(場面意味)がもっとも基本的で、ほかの意味を説明する基礎となるものとする。さらに、場面意味が話者の意図から説明されるとすることで、話者の意図を多様な意味を根底的に基礎づけるものとする。しかもこの意図なるものは、意味論的な性質への言及なしに特定されるとされている。

ロアーによれば、こうしたグライスの分析には二つの解釈が可能だ。一つ目の「強い解釈」によると、自然言語の意味はすべて話者の意図によって説明されうるといのが、グライスの主張だということになる。この場合、言語に関するすべ

ての意味は、会話の各場面で話者が何のためにある表現を用いるのかということから引き出されることになる。

この解釈を、ロアーは即座に退ける。なぜならこの解釈は「自然言語の意味はコミュニケーションにおける言語使用とは独立に構成されうる」(p. 101)という反論を招くからだ。ロアーによれば、この解釈に従ったなら、グライスの分析は一人言を口にしながら何かを考えるだとか、心の中でしゃべるだとかといった事態を適切に扱えなくなるのだ。というのも、こうした事例においては、話者は原理的にどんな意図を持って発話を行なっても、コミュニケーションが成立する。すると結果的に、どんな言語的発話も任意の意味を取りうることになる。

これに対し、「弱い解釈」では、公的な言語の字義的な意味は、その言語を使うときの話者の意図における規則性から引き出されることになる。この場合、たとえば自然言語表現を用いてもものと考えている場合でも、その表現の意味はその思考そのものから決まるのではなく、その表現を使うときの話者の意図の規則性から引き出されることになる。この解釈は強い解釈より整合的だ。

さて、この弱い解釈を採ったとしても、グライスの分析にはある決定的な特徴が残される。意味に関する個体主義だ。つまり、公的な意味は結局のところ、個々の話者の意図に一方的に依存するのだ。確かに強い解釈におけるように、個々の場

面における話者の意図によって表現の意味が定まるわけではない。それでも、表現の意味は究極的に個々の話者の意図が持つ規則性に依存している。つまり、話者の意図に対する社会的意味の随伴が生じているのだ。そしてこの随伴の基礎を、ロアーは(i)問題の言語の文法の(チョムスキー的な意味での)内的な実現、(ii)発話者がふつつ持つ意図の規則性、(iii)(i)と(ii)の相互作用、の三つに求める。そのうえでロアーが取り上げる問題は、話者の意図に対する社会的意味の随伴は、本当に一方的なものなのかということだ。

仮に「話者の意図」の個別化が指示や真理条件を前提とするものであるなら、一方的な随伴は成り立たない。なぜならそこには意味論的な要素がすでに含まれているのだから。だが「話者の意図」が指示に当たるものも含めて、個体内的な性質によって個別化されているとしたら、別の問題が生じる。「腿が関節炎だ」という信念に関するバージの議論を考慮すると、信念の命題的内容が純粹に個体的に定まるとするわけにはいかないからだ。

こうした事情を鑑みて、ロアーは次のように提案する。命題的態度は個体的に個別化されているのだが、指示は決定されないままとなっている。この考えを採用したなら、グライスの分析に含まれる一方的な随伴を擁護することができる。

以上がロアーの論文の内容だが、これに対してまずもって言いたいのは、グライスにとって社会的意味と話者の意図は

必ずしも一方が外的、他方が内的という仕方で非対称的に関係するものではないということだ。ロアーは話者の意図を内的なものとは見なしたうえで、社会的な意味が個体内的な意図に随伴すると考える。だがこれはグライスの考えとは違う。

グライスにとって心理状態とは行為を説明する前件であり、その限りでのものだ。それゆえにそれは複数の個人にとってアクセス可能な、その意味で社会的なものなのだ(三木, 2009)。このような心理観を採用したうえで、グライスはいわば意味を心理状態の一部(意図の特殊なもの)と見なしている。そこに上で述べた意味での非対称性はない。ロアーの言うように、確かにグライスにとって意味は意図に一方的に随伴する。だが、それらはともに外的なものなのだから、指示の決定を意図から排除せずに処理することが不可能だとは言いきれない。

とはいえ、指示が未決定な命題的態度が内的に個別化されているという発想は興味深い。例えば、個人の内部には解釈が未決定の意味表示が与えられているとしよう。そして解釈は個人を超えた社会的なレベルで与えられる。ロアーの説をこのように受け取ることが許されるなら、これを意味論の分野などに生かす道もあるように思える。

アヴラミデスの「ディヴィッドソン、グライス、言語の社会的側面」は、後期ディヴィッドソンとグライスの思想的な類似点と、それでも残る相違点を論じている。

この二人は、ともに言語の規約性を退ける点で似ている。このことは、ディヴィッドソンの「最初の意味 (first meaning)」という概念を参照することで見えてくる。

最初の意味とは話者がどのように理解されようと意図しているのかということだ。これは意味解釈の出発点であり、話者の意味論的な意図の第一のものとされる。こうした立場を採ることで、ディヴィッドソンは最初の意味の規約性を退け、意味というものを規則に基づくものではなく、「複数の話者の理性による制御下にあるプロセス」(p. 121)と捉える。これはグライスと通ずる見解だ。

ディヴィッドソンの言う最初の意味は、言語的なものに限られてはいない。そこでディヴィッドソンは最初の意味が言語的なものとなるのに満たすべき条件を考察する。一般的にはそうした条件はしばしば (i) 体系性を持つこと (合成性を持つこと)、(ii) 共有されていること、(iii) 習得された規約や規則性に支配されていること、とされる。だがディヴィッドソンは三つ目の条件を退ける。彼にとって、規約は言語の本質ではなく、ときに利用されるものにすぎない。そうでなければ、例えば言い間違いを含む発話がそれでも理解可能であることが説明できないのだ。

ここまでディヴィッドソンとグライスは同じ道を歩んでいるように見える。けれど二人の立場には大きな違いがある。というのも、ディヴィッドソンは言語的発話における最初の意味が体系性を持たなけ

ればならないという見解は保持しているからだ。グライスはこうした体系性も採用しない。なぜなら彼が公言する立場は、意味論的な概念は心理的な概念によって解明可能だというものであり、言語的の体系性さえ話者の意図を用いて解明できるといふものだからだ。

アヴラミデスの診断では、この立場の違いは言語と思考の関係に対する二人の態度の違いに起因する。ディヴィッドソンが言語的発話における最初の意味 (これが話者の意図に当たることを思い返してほしい) の体系性を主張するとき、彼は明らかに言語と同様の構造を持った意図の存在を仮定している。つまりディヴィッドソンにとっては、意図は言語を前提したものとなる。他方で話者の意図の体系性を採らないグライスにとって、意図に言語と同様の体系性は必要ない。むしろ意図は言語に概念的に先立ち、それに基づいて意味が生じると考えられている。

ディヴィッドソンの考えの背景には、ある認識論的、形而上学的な枠組みがある。彼にとって、言語な発話や思考の内容を与えるには、話者、解釈者、世界のトライアングルが必須となる。ある話者が世界の事態について発話し、それを解釈者が解釈することを通じて、はじめて発話の内容、および話者の思考内容が決定される。それゆえ、規約こそ必要とされないものの、(規約なしの)言語と思考とは並行的な概念となる。これに対し、グライスは明確な形而上学的背景を持たないま

ま、言語に対する思考の優越を仮定した。ここでこの二人の哲学者は道を違える。

とはいえ、言語に対する思考の優越を捨てたなら、グライス哲学の残りの部分をうまくディヴィッドソン哲学と組み合わせ、より強力な理論とすることもできる。そうアヴラミデスは結論する。

アヴラミデスのグライス解釈は、当時手に入る資料に関する限り、かなり正確でその批判も正しいと思われる。だがいまや事情は異なる。われわれはグライスの持つ形而上学的背景を知ることができる。グライスにとって、意味の根底には理性がある(三木, 2009)。すべての人間の理性の仕組みは同じであり、それゆえにすべての人間の自他に対する心理帰属がおおむね一致し、結果的に意味帰属もおおむね一致する。これがグライスの立場だ。

これを考慮したなら、グライスはディヴィッドソンと、実質的にはかなり似た立場に近づく。話者と解釈者をディヴィッドソンは分けて考えたが、グライスにとっては理性の同型性により、話者自身と解釈者が話者に帰属する心理は基本的に一致する。それゆえ、発話や思考の内容を与えるには、話者と世界があれば十分となる。そしてこれらは実際にグライスの理論において、前提されている概念だ。

このとき問題は、形而上学的背景の有無ではなく、その性質へとシフトする。理性というさらなる概念を持ちだすグライスと、それをしないディヴィッドソンという違いだ。前者は発話や思考の内容を説

明するために、理性という新たな概念を持ちだしている。これに対し、後者は寛容の原理を導入することで、新たな概念を取り込むことなく同じことを説明する。

二人のうちいずれが統合的な見解を提示しているにせよ、グライスの哲学はアヴラミデスが行なった以上に綿密に研究する必要がある。でなければ、グライス哲学の本当の利点も欠点もわかるまい。言語の体系性の扱いに関するグライスの立場についても、彼の形而上学などを考慮したうえで、改めて検討すべきだろう。

本書にはほかにも、一つの文の発話に複数の命題の列を対応させることで、グライスにおける「規約の含み」をいくらか形式的に扱おうという研究(スティーヴン・ニール「含みと色合い」)や、グライスが提示した意味の分析や含みの理論を、話者ではなく聞き手の側から見てみる試み(マリナ・スピサ「反対側から見た意図」)など、興味深い論文が収められている。それらの多くに共通するのは、単にグライスの哲学自体を云々するのではなく、グライス哲学をいかに現代の言語研究に接続するかという問題意識だ。実際、グライス哲学には現代でも生かされうる資源が豊富に残されているように思われる。本書はそうした資源を発掘する、最初の、大きな一歩となりうるだろう。

文献

三木那由他(2009). 「理性による意味の基礎づけ—グライスにおける意味—」, 『哲学論叢』, 第36号.